# 大樹の礎

Taiju no Ishizue

第10号 2012 10.1

発行者：学校法人 城西医療学園
日本医療科学大学
〒350-0435
埼玉県入間郡毛呂山町下川原 1276
TEL：049-294-9000
URL：http://www.nims.ac.jp


## 第一回「海外研修」を実施！

日本医療科学大学の国際化プログラムの一環として、第一回目となる海外研修が新藤副学長を団長とする教職員六名、学生三十四名の計四十名によって九月三日から九日まで、アメリカのオレゴン州ポートランドを中心に実施されました。

高齢者施設（ジェニングス・マッコール・センター）の視察、在宅サービスの実態視察（ローブス&フィッシーズ・センター）と実際に在宅にお弁当を運ぶボランティア活動の体験、オレゴン州の先端医療施設（プロビデンス・メディカル・センター）の見学、現地で奉職している日本人医師と理学療法士の方による、アメリカにおける保健医療の状況の解説、乳がんサバイバーを中心としたボランティア団体との交流会など、充実した内容のプログラムが展開され、参加した学生も様々な刺激、今後の学習への意欲をかきたてられて帰国しました。

## 参加学生の声

今回、日本医療科大学オレゴン研修IN USAに参加して、この一週間の留学期間は、私の物事に対する考え方や生活の仕方、将来についてなど自分の今後に影響を与える素晴らしい体験となった。

今回オレゴンには医療学生として行き、見学内容は観光もあったが病院見学やローブス&フィッシーズと言われる高齢者のためのランチ宅配、乳がん患者とのドラゴンボートによる交流、現地の医療現場で働く日本人医師によるレクチャーなど医療に関わるところに多く見学をすることができました。一日一日がとても内容が濃く、学ぶことが多大で充実し過ぎていたあの一週間を送れたことに感謝したい。見学するところは自分の学んでいる分野ではない内容だったが、その内容は決して無駄ではなく、むしろもっと知るべきだと思った。日本にいると自分の分野のことでいっぱいになってしまいがちだが、少しずつでも知っていき他の分野のことを理解することは重要であることを実感した。現地の医療に関することは日本との医療制度の違いにより理解することが難しいところもあったが現地の方が理解できるように補足してくれて、良い研修になるようたくさんの努力をしてくれたことがとても嬉しかった。そして現地の方に感謝いたします。本当にありがとうございました。

私は今回の研修で一番印象に残っているのは医療現場や老人ホームでのオレゴンと日本での雰囲気、施設の機能の違いである。なぜなら日本の病院は暗く、怖いイメージがあり、病気や検査の方が行き、老人ホームは自宅で生活することが困難になった人がヘルパーの方に手を借りながら過ごすところである。これが日本の場合である。しかし今回行ったところの病院は全く日本とは違うイメージを受けた。病院はとても明るく、教会や医療に関する書物がたくさん置いてある図書室があり、そこで講演を行うこともあり、人々がそれぞれの目的で来る一つの施設でそこに病院もあるという感じでした。老人ホームは一つの集合住宅街のようで一人部屋から三人部屋があり、遊びに来た人が泊まれるような部屋造りができ、キッチンの大きさなど自分のスタイルに合わせ部屋を選ぶことができ、それぞれにマンションの一室を与えられる、そのような施設でした。この様な違いに私は衝撃を受けました。オレゴンのすべての施設がこのような施設ではないがこのような施設造りが日本にもできたらいいと思いました。

今回、研修に参加し本当によかったです。このように考えさせてもらえる機会を与えてくれたことに感謝するとともに、研修で学び、感じ、思ったそれぞれのよき思い出を忘れずに、この留学での経験を次のステップとして今後の自分の将来に役立てたいと思います。

診療放射線学科2年　知野　有沙

## 連続エッセイ⑨ 「深遠」について考える

診療放射線学科　講師　三田満男

今年の七月に「ヒッグス粒子」が発見されたとの報道が、テレビ・新聞等で大々的に行われた。「世紀の大発見」であるらしい。

また、めったに見ることのできない「金環食」についてもどこで何時何分ごろ見られるとの情報が詳細に報道されていた。ミクロの世界とマクロの世界のいずれもが益々深く研究されていたことが分かる。

私は中学・高校で、分子は原子で構成されていて中心に原子核があり、その周りを電子がまわっていてこれ以上は細かくならないということと、宇宙はおよそ四十五億年前につくられたと習った記憶がある。それがたった数十年の内に物質の最小単位が十数種類の素粒子であること、宇宙はおよそ百二十七億年前に誕生したと推測されるに至っている。へそ曲がりでなくても、「その素粒子というものは一体何でできているの？」とつっこみたくもなる。いずれにしても、「さいはて」「極限」への探求には目を見張るものがある。

囲碁の藤沢秀行と将棋の米長邦雄が、囲碁と将棋の神様の力を百としたら、自分の実力は幾つぐらいかをそれぞれ紙に書いて同時に見せあったら、期せずして「五か六くらい」と同じ答えを出したとの逸話がある。今年は、囲碁と将棋が徳川幕府から俸禄を貰うようになって四百年目。四百年かかってそれぞれの第一人者がたどり着いた地点が「五か六」というその奥深さに今更ながら感嘆するばかりである。驚くことに、囲碁にしても将棋にしても全く偶然性の介在しないゲームは、既に先手必勝か後手必勝かが決まっており、ただその気の遠くなる無数の組み合わせ手順を調べつくすことができないために、ゲームとして成り立っているらしい。コンピューターがどんどん進化しているこの時代、最短で勝利にたどり着く正解手順を導くことは果たして可能なのだろうか。

ある宇宙物理学者は、「私は二つのことを知りたいと思っている。一つは宇宙がどのようにして作られたのかということ。もう一つは、なぜ私は、宇宙がどのようにして作られたのかを知ろうとしているのかということ。」と述べている。

また、ガリレオは「いったいいつになったら疑問を持たなくなるのだろう」とも述べている。

いずれにしても、人間の営みの中で「深遠」に対するチャレンジは、今後も続いていくのであろう。

# 平成二十四年度に着任された教員をご紹介します。

①所属学科・職位
②専門分野・担当科目また、何人かの先生には
③本学の学生の印象
④本学において目指していることについてもお伺いしました。

★小山英子（こやまえいこ）
①看護学科学科長　教授
②看護学概論　基礎看護学

★平井紀光（ひらいとしみつ）
①臨床工学科学科長　教授
②人間工学　医用安全学

★酒本勝之（さかもとかつゆき）
①臨床工学科教授
②医用生体工学
③学習に対する意欲に若干のばらつきがあるように感じます
④問題を系統的に解決できる臨床工学技士を育てたい

★島田千恵子（しまだちえこ）
①看護学科教授
②基礎看護学　看護教育学
③どの学生も「のびしろ」があるように思えます
④地域に根差しつつキャリアを発展させていく看護師を育てたい

★澁谷貞子（しぶやていこ）
①看護学科教授
②成人看護学
③素朴で素直
④優秀なナースを育てること

★吉行郁美（よしゆきいくみ）
①看護学科教授
②小児看護学

★北原佳代（きたはらかよ）
①看護学科准教授
②精神看護学

★鈴木久子（すずきひさこ）
①看護学科准教授
②在宅看護学

★大野順子（おおのじゅんこ）
①看護学科准教授
②地域看護学

★宮脇佳子（みやわきよしこ）
①理学療法学専攻講師
②解剖学
③一年生は次第に医療人になるということへの自覚が芽生えてきているようです。上級生は挨拶がよくでき、しっかりしているなという印象です。
④教育者・研究者としての努力・研鑽を忘れずに仕事にとりくみたい

★石渡香住（いしわたかずみ）
①作業療法学専攻講師
②精神科作業療法
③素朴でかわいらしい印象
④実践的な作業療法士の育成と人間的に魅力ある社会人の育成

★藤田文子（ふじたあやこ）
①看護学科講師
②基礎看護学

★高岡素子（たかおかもとこ）
①看護学科講師
②基礎看護学

★小林　美智子
（こばやしみちこ）

①看護学科講師
②成人看護学

★棟久　恭子
（むねひさきょうこ）

①看護学科講師
②成人看護学

★坂口　由紀子
（さかぐちゆきこ）

①看護学科講師
②小児看護学
③大変活気がありますね
④現場とのつながりを大切にし、心豊かな看護学生の育成に努めます

★森島　知子
（もりしまともこ）

①看護学科講師
②母性看護学・助産学
③素直で活発
④高い倫理観をもつ看護専門職の育成

★石田　和雄
（いしだかずお）

①看護学科講師
②在宅看護学リハビリテーション看護学
③多彩な可能性を秘めている
④質の高い実践看護師の育成と国際的・学際的な看護研究

★佐々木　敏彦
（ささきとしひこ）

①臨床工学科講師
②電子工学
③まじめな学生が多いのですが、長らく医療現場にいたものとしては、派手なお化粧や金髪の学生がいることに驚きました。
④将来の医療従事者として、人に奉仕する心、献身的な精神を持った学生の輩出を目指します

★上屋敷　繁樹
（かみやしきしげき）

①臨床工学科講師
②生体代行装置
③勉強に取り組む姿勢がよいと思う
④どこでも通用する技士を育てたい

★武田　真澄
（たけだますみ）

①診療放射線学科助教
②画像検査技術学
③明るくて素直で元気
④「わかりやすい授業」と「学生の潜在力を引き出す指導」にこころがけます

★森田　悠介
（もりたゆうすけ）

①理学療法学専攻助教
②機能能力診断学

★丸　達也
（まるたつや）

①作業療法学専攻助手

★川戸　仁美
（かわとひとみ）

①看護学科助手

★蛯名　小百合
（えびなさゆり）

①看護学科助手

## 今年も「坂戸よさこい」に参加！

八月十八日（土）に行われた「坂戸よさこい」に、今年も本学の「日本医療連」が参加しました。当日の模様は、左記のURLにてご覧いただけます。

URL：http://www.nims.ac.jp

## 求人説明会　開催！

八月二十三日（木）、池袋のホテルメトロポリタンにおいて日本医療科学大学主催による求人説明会が開催されました。

当日は、全国二百十五施設から二百九十三名の採用担当者の皆さんにお集まりいただき、それぞれのブースで本学の四年生に対して説明を行っていただきました。

本学の求人説明会は、年々参加していただく施設が増えており、来年は更に広い場所で行うべく、準備を進めています。

# 社会を生き抜く力を育てたい！

（七月一日、旭日小綬章受章祝賀会における新藤宣夫理事長の挨拶　抜粋）

少し前まではそうでもなかったのでございますが、こうして壇上に上がり、こんなに多くの皆様方の御臨席を賜ってこうした会を開いていただきましたことに対して、言葉にならない感動をおぼえております。本当にありがとうございます。

もとより私は叙勲にはあまり関心がなかったのでありますが、城西学園の九十周年、城西放射線技術専門学校の五十周年、城西川越学園の四十周年、城西医療技術専門学校の閉校と日本医療科学大学の開設などに対して、「新藤宣夫」のお神輿を担いでくれた多くの皆様の代表として、また、この受賞が学園全体がもっと大きくなっていくための契機になればと思い、この祝賀会をお願いしたのが本音でございます。

城西学園を受け継いだときはベビーブームの真っただ中でございました、その中で甲子園への出場や国内旅行も大変な時期にアメリカとの交換留学璃実施などを先生方の努力のもとに行ってきました。

城西放射線技術専門学校では、夜間の学生をどう集めたものかとずいぶんと悩みました。おかげさまで時代の要請にもあったのでしょうか、多くの入学生に恵まれましたが、なにぶん夜間の学校ですので時間が限られていて、補習授業などがなかなかできない、そんな中で先生方の努力によって合格率百％の年も何回かありました。

城西川越高校は決して恵まれた立地条件ではなかったにもかかわらず、先生方が一生懸命努力して、東京大学への合格者が生まれるまでになり進学校としての礎を築いてくれました。

城西医療技術専門学校の先生の中には、大学院に行って勉強していた人がおりました。聞くと、いつかはこの専門学校は大学に変わっていくだろう、その準備をしているのだということでした。少子化ということもあり、銀行がなかなかお金を貸したがらないご時世ではありましたが、思い切って大学を作ったわけでございます。

さて、今般私は叙勲の栄に浴したわけですが、父親（新藤富五郎　明治三十年生まれ）も四十年前に受章しております。

父親は房総半島の漁村の出身ですが、横浜の海軍の関係の施設で職工として働いておりました。不慮の事故によって十七歳のときに片手を失いました。いったん田舎に戻りこれからの生活を考えた末、英語の勉強をするために正則英語学校に入学したのです。小学校しか出ていないものが英語を学ぶことは相当に大変だったようで朝から晩まで勉強漬けだったようです。ところが、しばらくして実家から「これ以上送金援助するのは無理だ」との知らせが入り、一旦は田舎に帰る決心を致しました。その時、恩師の先生が翻訳の仕事や予備校の教師をやって勉強を続けなさいと言っていただいた。今、私には、三年や四年で人に英語を教える立場になるための努力のすごさは到底想像もつかないのです。

そんな事情もあり、父親は私たち子供に対して勉強しろなどといったことはありません。身を持って社会を生き抜いていくための力を教えてくれたのだと思っております。銭湯に行くと、左手がないことに周りの人間がどうしても注視します。それに耐えて生きていくことの力の大切さを子供ながらに思ったものです。

父親と田舎の海に潜ったとき、勉強は手抜きはできても、海に潜ってサザエやエビをとることは自分との戦いでもある、もう一歩で手が届きそうなときの頑張りなどは、今の父親が私にくれた大きな教育だったのではないだろうかと思っているのです。

城西学園が経営に行き詰ったとき、私の父親は同郷の水田三喜男先生（通産大臣・大蔵大臣を歴任）に相談に行って学園の経営権を手にしたのですが、経営を盤石にしようと思って大学の付属高校になろうと思ってもどこの大学も相手にしてくれなかったので、水田先生の提案で思い切って大学をつくろうということになり、城西大学が生まれたわけです。

母親の思い出も少しさせていただきます。ある時、私の顔を見て「お前の運勢を占ってもらったら、真っ白な運勢だそうだよ」といったことがあったのです。父親は野球が好きで一回戦から応援に駆け付けていたのですが、いざ甲子園出場が決まった時には、父親は病に倒れていて私が甲子園に連れて行ってもらった。また、体育館が火事になったときには、「おまえは本当に運がいいな。実はあの体育館は古くなってきたので建て替えようと思っていたんだ。解体費用がかからなくてよかったな」と、本音ではないのでしょうが慰めてくれました。そんなこんなで、私はどんな事業も慎重の上に慎重に考えてやっているつもりなのですが、心の片隅に「母親がついていてくれているから大丈夫だろう」と思って今日までやってきたのです。

最後に我が家の重鎮（新藤偕子　城西川越学園理事長）についてお話させていただきます。家内は私の父親から教育について薫陶を受けておりまして、幼児教育を熱心に行っておりました。かなり有名な人も教えたことがあると自慢いたしております。その教育の過程で、城西高校にネイティブの英語の先生を招くことになり、そこから交換留学の話につながっていくのです。その際、家内から、「若い高校生をアメリカに送るというのに、あなたはあちらのことをなにも御存じないのではないですか」と言われたのです。そこで、まだ中学生だった私の長女をアメリカに送り、現在に至る礎が出来上がってきたわけです。

いままでお話ししてまいりましたように、本日の栄誉は、先生方、御父母の皆様、私の家族を始めとした多くの皆様のおかげでございます。

もう少し私学振興のために力を尽くす所存でございますので、今後ともご指導のほどをよろしくお願い申し上げます。

本日はありがとうございました。

## 編集後記

異常に暑かった今年の夏もようやく終わりかけ、後期の授業がスタートしました。

遅くなりましたが、教員の紹介のページを見てお分かりのように、主に新学科の設置に伴い、四月から多数の新しい教員が入職されました。

本誌の発行が学生、教職員をはじめ本誌の読者との距離を近づける一助になればと願っています。